旧制都立六中第20回生勤労学徒動員の記録
（思い出すままに）

安達　祝伍

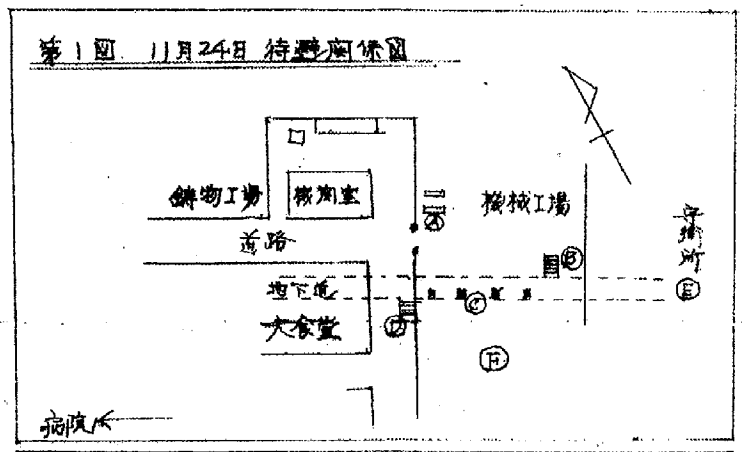
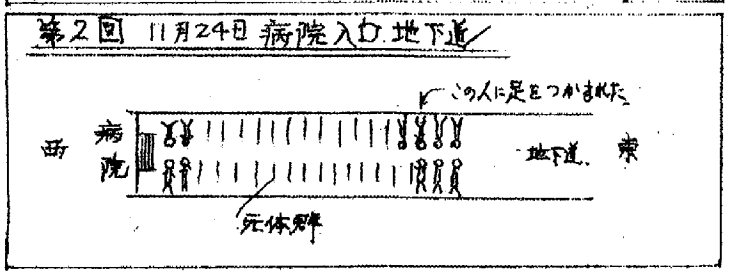
旧制都立第六中学校（今の新宿高校）４年生のABC組（約150人）は横河電機へ、DEF組（約155人）は中島飛行機武蔵製作所へ昭和19年７月に動員された。

私、安達祝伍は中島飛行機組で、青年学校で職場の情況や就業上の注意等の教育を受け、適性検査終了後に現場に配属された。

私は、旋盤工として鋳物工場から運ばれてきた配油盤（エンジンの中心部にあって、各シリンダーに潤滑油を配給する部品）の最初の荒削りを担当したⒶ。

昭和19年11月24日昼前、「空襲だ！避難しろ」という声で、取るものもとりあえず地下道入り口Ⓑから降りて、西に向かい、所定の退避場所に行き、同級生と並んで座っていたⒸ。

この場所は大食堂の東側にあった地下道入口Ⓓから東寄りで、防火壁（地下道幅の半分ぐらい突き出ていて、厚さ40cm位、高さ1m30cm位の木製で、中に土が詰まっていたように記憶している）が設置された２番目の壁のそばだった。

退避してまもなく、担架にのせられた人が２人、目の前を西に向かって行った。爆弾でやられた人だとは思わなかったので、怪我をするほどあわてて逃げた人がいると同級生と話したが、既にそのときには、爆弾が落ちていたのだったⒺ。

しばらくすると、ドドーンという音と共に、目の前を真っ赤な炎が西から東へ走った。とっさに私は前掛け（油よけに母が作ってくれたものを付けたまま避難していた）を頭から被ってうずくまった。周りの人は立ち上がったようだった。何がなんだか判らないうちに人波みに押されて真っ暗な中を東に歩いていた。